東南アジア研究　18巻3号　1980年12月

編集者のことば

矢野　暢*

この『東南アジア研究』で「近代日本の南方関与」というテーマで特集号を組むのはこれで2度目である。2年ほどまえ，第16巻1号（1978年6月刊）で，6篇の論文および資料よりなる特集を組んだのが最初であった。「南方関与」という新しいモチーフで専門的な研究が行われ，そしてこのようなかたちの特集号を学術専門誌が組むのは稀有の例とあって，予想外の反響があった。

この分野への関心は，その後日本の学界に次第に定着することとなり，たとえば正田健一郎編『近代日本の東南アジア観』（アジア経済研究所　昭和53年）などのような業績の刊行をみることにもなった。なかでも，昭和52年からはじまった文部省特定研究『東アジアおよび東南アジアにおける文化摩擦』は，「近代日本の南方関与」というテーマを学界に定着させる上で決定的な契機となり，この特定研究が継続した3年間のあいだに，きわだった水準の実証的な業績が数多く公刊されたのである。

本号で2度目の特集を組むにあたって，これまで私どもが心掛けてきた「南方関与」研究上の配慮をはっきり打ち出すことにした。

ひとつは，従来の研究が日本の南方進出なり「南進」なりをとかく日本側の事情だけで説明しがちであったのを改め，東南アジア側の事情を現地で得られる一次資料によってできうる限り明らかにしようという配慮である。巻頭に置いた吉川利治氏の論文は，タイ国農商務省で同氏が発見した貴重な一次資料に基づいて執筆された画期的な業績である。明治期の日本人のシャム進出をシャム側の事情を加味して解説しようという試み自体，大いに注目されねばならないだろう。

もうひとつは，日本の南方進出に果たした台湾の役割を重視しようという立場である。中村孝志教授および長岡新治郎氏の論考は，たんなる台湾・日本間関係の域を越えて，近代日本外交史の上で，台湾が南洋と日本とを結ぶ戦略的拠点として重要な役割を果たしたことを実証する貴重な業績である。中村孝志教授その他による研究によって，日本の南方関与に果たした台湾の決定的な役割のことが明らかにされてきていることを，ここで改めて特記しておきたい。

第3に，南方と関与した日本人，ないし≪日本≫それ自体の精神性という問題がある。南方関与のこの局面は，どれほど掘りさげても十分ということにはならないだろう。おそらく，近代日本の精神史との対決という次元にまで問題は及ぶことだろう。いずれにせよ，「南方関与」研究の眼目のひとつは，まさにその点にあるといってよかろう。

その点，吉川洋子氏の論文は，フィリピンに進出したごく初期の日本人であり，その後のフィリピンと日本との関係の基礎をつくった田川森太郎という注目すべき人物についての現地調査を踏まえたおそらく初めての実証的な業績である。小島勝氏の論考は，南洋に進出した日本人が現地でどのような精神的鋳型にはめられていたかを示す興味深い分析であって，貴重な業績といえよう。安場保吉氏および太田弘毅氏の論考は，昭和期の「南進」についての貴重な視点ないし一次資料を提供する作品として見逃せない作品である。

いずれも，現在の日本における南方関与研究の深まりを示す一級の業績であって，学界にたいするかけがえのない貢献であるといえるだろう。

* 京都大学東南アジア研究センター

Editor's Note

Toru YANO*

This special issue on the historical aspects of Japan's presence in Southeast Asia is the second round of a collective effort by scholars to challenge the question of Japan's relations with Southeast Asia in the period after the Meiji Restoration and to open new frontiers in Southeast Asian studies in Japan. The first round was presented in a collection of six papers, which appeared in the Vol. 16 No. 1 issue of this Journal in June, 1978.

This special issue contains seven papers on the theme of "Historical Patterns of Modern Japan's Commitment to Southeast Asia." The contributors were encouraged to present fresh points of view in examining their topics.

First of all, the relationship established between Japan and Southeast Asia must be explained by historical necessities on the part of the Southeast Asian countries. The article by Prof. Toshiharu Yoshikawa on Siam-Japan relations is especially noteworthy in that it is based on first-hand materials gathered in Thailand.

Secondly, Taiwan's position, both strategic and geographic, must be heeded as a crucial link, without which Japan's approach to Southeast Asia would have been far less smooth. The contributions by Prof. Takashi Nakamura and Mr. Shinjiro Nagaoka are significant in this respect.

The other articles, all well-researched, focus on Japan's stance vis-à-vis Southeast Asia covering such varied topics as the type of Japanese who went to Southeast Asia, the educational culture imposed on Japanese citizens residing in the region, and the substance of the Japanese concern with Southeast Asia just before and during World War II.

The Editor hopes that these articles will stimulate an interest in this subject in academic circles, both within and outside Japan.

* The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University